

昭和三十四年七月二十五日発行第
（毎月一回・十五日発行）司
（通第一五四号）

慈光

第十四卷

第一号

次 目

- 煩悶の下に光明あり……………近角常穎：（1）
淨土問答……………福島政雄：（4）
仏法は万人の問題である……………花田正夫：（10）
一道会の記（一）……………柳原徳草：（14）

煩悶の下に光明あり

近角常觀

吾人が切に現代思潮のために煩悶したまえる人に向つて警告せんと欲することは、煩悶の下に光明あり、即今その脚下に樂地ありということである。

華嚴の滝に投じ、阿蘇の噴火口に投する人は、今やまさに大安慰を得べき眞際まで來ていながら、自ら身を水泡に帰せしめ、生きながら心を火燄の中に入るるものである。

未だ光を見出さぬ間の所作なれば致方もなきことなるも徒らに虚飾と浅慮とを發表して人の笑を買うのみならず、全体死後の境界につきて如何に考えつつあるのであろう。勿論その志の憐むべきは察するに余りあるも、如何程煩悶に陥ればとて、自ら死を招くというは宗教の説きつある来世苦樂の境につきて一顧せぬものにして、そもそもその所作は古聖賢に対する一大侮蔑である。絶対の救済に対する根本的罪悪である。

吾人は世の煩悶して空しく身を亡す人に向つて警告する。仏陀の光明は正に諸君の上を照らしつゝあるのである。すべからく、一刻も早く仰いでこれに安んづべし。若

し直ちにこれに安んずること出来ずとも必ず、救済にあずかるは、すこしの疑なきことなれば、たとい如何なる境遇にあるとも確然不動にして最終暁の明星かがやくときまで待たなければならぬ。吾人の切なる忠告は「直に光を仰げ、仰ぐこと出来ねば待て」ということである。

なお一步進みて、煩悶を解かんがために道を求めてある人に向つて警告する。そもそも宗教を煩悶を解く手段と考えては居らぬか、信仰ということを己を安んずる道具と考えて居らぬか、仏陀をもつて恐れ多くも我が煩惱を拭い去るべき雑巾の如く考えているのではなきか。全体仏陀は恵みの親である。生命である。我々は全身を投じてこれに任すのである、その足下に感泣するのである。我々は生殺与奪、如何様ともその御心に任せ奉りて、恰も慈母の懷に抱かれたる如くである。我等は仏陀の御力に任せてこそ安心することが出来るのである。我等が仏陀を手段として煩悶を去らんというような横着驕慢な考では信仰に入ること

は出来ぬ。

次に吾人は道を求むるがために煩悶している人に向つて警告する。私はこれほどまで求めているに光の來らぬは残念であると思うて居られぬか。

全体われは求めて居ると思うて居るのが誤である。すでに仏陀が我等を求める、我等を喚びたまうのである。而して自分で求めつゝあると思うて居る人は、自分で遁れつがあるのである。

又道筋が解つて居ると思うて居るのが誤りである。実はすこしも解つて居らぬのである、全体仏の恵みは解つて喜ぶのではない、恵を喜びて疑うことの出来ぬのが信じたのである、明らかになつたのである。そもそも我等が大いに喜びて初めて仏陀があるが如く考えるのが誤りである。我等は喜ぶも喜ばざるも、気が附いても気が附かずとも、たといこれに背くとも、且常に仏陀は我等を憐み、悲しみ、愛し、慈しみたまいつつある。我等はこの如き仏陀に對して見れば、我等より求めずして光明自ら來り「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる」と感泣し奉るの外はないのである。

この如く仏陀の御恵みが我等の胸中に届きたるが即ち口に溢れ出で、南無阿弥陀仏となるのである、これ實に過去の日本に於いて、源平時代の煩悶を一掃して鎌倉時代の

清廓なる一世を照したまいし光明である。法然聖人が

南無阿弥陀仏。往生之業、念佛為本。

、という一大法幢は、當時心靈界の中心である。上下、貴賤、文武、僧俗、皆その獅子吼の下に雲の如くに集り來りたのである。花の盛の敦盛を討ちて無常を覗じたる阪東武者、熊谷直実も馳せて聖人の門下に剃髪出家したのである。東大寺の大仏を焼討にして聖武、光明の両聖の偉観を兵艦に委したる平家の落武者、重衡卿も書をもつて聖人に道を求めて安心して歎られたのである。しかのみならず山賊海賊、窃盜放火殺害を極めたる津の國の耳四郎も櫛の下に聖人の教を聞きて遂に改悔懺悔して、その行いを悛め、一世の達識、人臣の至極たる閑白兼実公も冠を傾けて聖人の法筵に感涙を注がれたのである。

実に南無阿弥陀仏の名号は一切衆生があこがるる大慈の父の御名である。一切衆生が安んずる大慈の母の御懐である。一切衆生の兄弟が護持養育を蒙れる親切があふるる母の乳房である。誰かこの念佛の下に全身を投じて渴仰せざるものやある。

當時、温順博識の聞えある聖覺法印も、從順如法なる信空土人も、聖人の門下に安心を見出されたのである。しかし同じく聖人の南無阿弥陀仏、往生之業、念佛為本の御教を聞きて敬虔の念をもつて満たされ、信業の悦びをもつ

てあふたれ親鸞聖人の胸の中は即ちこれである。

「しかるに念佛よりほかに往生の道をも存知しまた法門等をも知りたるらんとこころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、大きなるあやまりなり。親鸞におきては、たゞ念佛して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとの仰せをこうむりて信するはかに別の子細なきなり。……たとい法然聖人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」

この如く全身を挙げて如來の光明中に投じてみれば、何人か心を安んぜざるものがある。仏陀の御恵みの下に、智愚の區別もなく、境遇の善惡もない。大慈悲に対しては吾人は一点の私をさしはさむべき余地を見出さない、何ぞ自ら求めて苦しみ、徒らに小智淺慮を費して煩悶懊惱する。いわんや自ら身を水火の中に投ぜんとするが如きは、この如く万世の光明たる古聖賢に対する侮蔑たるのみならず、大慈大悲の如来の悲憫救済に対しても申訳なきことである。全体がくの如き大慈大悲に対して善惡の沙汰をなすが如きは根本的の誤りである。そもそも人の煩悶なるものは自己の境遇の善惡につき、倫理行為の善惡につき、人情につき、信念につき、万事につき、この善惡の計らいなるものである。吾人はこの如き絶対の大慈大悲に対してはこのはからいは無用である。

「まことに如來の御恩ということをば沙汰なくして、われもひとも、よしあしということをのみ申しあえり。聖人の仰せには善惡のふたつ総じても存知せざるなり。そのゆえは、如來の御心によしとおぼしめすほどに知りとおしたばこそよきを知りたるにてあらめ、如來のあしとおぼしめすほどに知りとおしたばこそあしきを知りたるにてあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はみなもてそらごと、たわごと、まことあることなきにただ念佛のみぞまことにておわしますとこそ仰せは候いか。」

そもそも善し悪しの沙汰をするのは煩惱具足の身をもつて善くすることが出来ると考えるからである。火宅無常の世界に居ながら、悪しきを避けんと企てるからである。全体人間は罪惡の塊である。世界は泡沫の夢である。絶対の闇黒、絶対の迷盲、絶対の虚妄である。独りこの闇を照らし給う、絶対の光明、絶対の眞実、絶対の清淨は仏陀である。如來である。念佛である。唯仏一道獨清閑である。吾人はすべての計らいをなげすて、如來の慈悲海中に投入すべきものである。ここに至りて如何なる境遇も、如何なる理想も、如何なる倫理標準も、人生的欲望も、野心も、眞面目も、尙れも人間的の小さな立場をひるがえして、如來の御心に融和して、同一意味の信仰となるのである。ここ

に至りて煩悶懊惱も、あたかも宿夢の如くである、而して眼底に輝き来るものは尽十方無碍の光明である。

『煩悶の下に光明あり』

この一語もつて幾多の煩悶者に警告する次第である。吾人は決して煩悶を嘉みする者ではない。無碍の光明は一切衆生の上に光被して、如何なる煩悶をも照し破るということを断言して警告するのである。すべからく即今その光を仰

淨土問答

福島政雄

元氣激刺としているから自分の元氣をたのんで老人の世迷言などと悪口をいうが、お前が老年まで生きていたら、ああ、あれはお爺さんの世迷言ではなかつたと悟る時が来るだらうよ。

明治廿九年八月廿七日朝記す

A 仏のお淨土というものはどんなに結構なところだろう。私も老人になつた。往生淨土ということも今から数年の後には必至であろう。どうか静かに落ちついて往生したいものだ。お念佛申してしずかに。

B お爺さん、何を世迷言を云つてゐるんです。仏のお

淨土などいうものがあるのです。どこにあるんです。そんな空想の世迷言なんか止めたらどうです。

A お前はそこにいたのか。世迷言を止めろと言つてもそんなに簡単に止められるような世迷言ではないよ。この世迷言にはしつかりした根源があるよ。お前はまだ若くて

それでもお淨土は十万億仏土の西方にあるなどとは世迷言ではありませんか。地球を西へへと行つて御覧なさい。また出立したところへ帰つて来るではありますか。それ位のことはお爺さんだつて知つてゐるでしょう。それなのに、これから西の方、十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極樂といういうようなお經を眞面目讀つて

読んでいるではありませんか。馬鹿々々しくて話になりませんよ。

A お前は浅薄なことを考へてゐる。西といふのは地理的に西に行けば極楽があるという意味ではない。も少し深い象徴的な意味だ。象徴と言つてもお前にはわからないだろう。有限を以て無限を象徴し、有形を以て無形を象徴すというところだ。淨土は十万億土の西であると同時にお前の近くにお前に接してあるのだ。絶対の世界であつて、此の世と相対立しているような世界ではないのだ。たゞ吾々凡夫に心を静めて心を定めさせるために相対的に方角を定めて西方と言われてあるのだ。

B お爺さんはまたむづかしいことを言いますナ。象徴ということ、私にだつてわからんことはないと思うけれど、有限を以て無限を象徴しなどと言われるとわからなくなる。も少しわかり易く言つて下さい。

A それではナ。お前だつて毎日仏壇を形式ばかりは拝んでるようだが、お名号を何と思つてゐるか。お名号は象徴だよ。広大無辺な佛陀をあらわす象徴だよ。即ち佛陀を感じたよりになるしなのだよ。それでお淨土だつて広大な世界だけれども、ただ広大無辺と言つて見ても吾々には何の感じもおこらないので、お經では色々の象徴でもつてお淨土を感じしめるように説いてあるのだ。

というようなことを考へてゐるだらうが、人間の愛といふものがそのまま永遠の愛であることは決してない。いや、人間の愛はどこでにならぬものはないのだ。

B そうでしようか。西洋の詩人などは永遠の愛を歌つてゐるではありませんか。

A それは詩人が人生を美化してうたつてゐるのに過ぎない。人間の相対愛といふものは常に変転してゐるもので、殊に愛憎と言つて愛は憎みに裏づけられている。可愛さあまつて憎さ百倍ということもある。兎に角あてにならぬものだ。

B 併し親子の愛は特別のようと思われるが、どうでしょう。

A 親子の愛を特別だと感じてゐるならば、まだお前は話せる。併し親子の愛といふのも人間の愛である限りは絶対のものではない。色々の条件に左右されるものだ。

B それならば、お爺さんは絶対に温かい心というものは此の人生に無いと言われるのでですか。

A いや、人間の愛そのものとしては絶対のものではないが、此の人生には人間以上の絶対のまことというべきもので、此の人生を温かくするおす大生命というか、久遠の真実生命というか、人生の愛とか誠とかいうものの根源をうるおしている、生きたいのちである。親子の愛といふも

のは、この根元のいのちに最も触れ易いものであるから、吾々は親子の愛が特別のもののように感ずるのだ。

B その温かい心の根源といふものがお經に説かれてあるのですか。お爺さんはどうしてそれを感ずるようになつたのですか。

A お經は大無量寿經だ。このお經には四十八願といふことが説かれてある。それは法藏菩薩という菩薩が佛国土の建現のために立てられた願であつて、この願成就の時に法藏菩薩は阿弥陀如来となられるのだ。同時に淨土も建立されるのだ。そして四十八願の中心になるのが久遠のまことの生命であつて、まごころと信仰と永遠の生命の希望とを衆生にあたえ、如何なる苦毒にも耐え忍んで真実の国土を衆生のために開きたいという願である。その真実の国土は即ち淨土であつて、佛の慈悲から建立せられる國土であるのだ。

B その法藏菩薩の願とか、阿弥陀如來とかいうのは、神話のようなものじやないでしようか。歴史上の人物でもないようですナ。

A 歴史でもなければ神話伝説でもない。これは吾々が心魂に感ずる生命の事実の世界であり、釈尊が大無量寿經において吾々のために開いて下された世界である。久遠のまことの生命といふのが概念沙汰ではなくて、吾々が直接

B そう言わるれば少しわかるようですがれども、金銀珊瑚だ、光明だ、音楽だと説かれても、私等のように今日の科学精神で育てられてゐるものには、ちつとも有り難いと思いませんよ。何だ、お淨土といふのはお伽噺ときばなしにあるお菓子や玩具の世界のようじやないか、というような感じを起すのです。お爺さんのような有り難い心持になれませんよ。それでお爺さんを馬鹿にしたくなるのです。

A お前は今日の科学を信仰してゐるのか。なるほど今日の科学はなか／＼進んで電子だの原子だの中間子だの相対性原理だのと言つて、その實際上の應用も大したものだが、併し科学はあくまで冷たく見るものだ。お前だつてそうだろう。いくらお淨土の説き方を悪口しても、そのようなお淨土は佛陀の温い慈悲の心から出していることがわかつたら、そんな悪口は言わなくなるだろう。科学は人間を物として取扱うものだ。

B それは私だつて温い心を求めてはいるのです。併し佛陀のお慈悲というようなことはわからないのです。人間の温かい心というならばわかります。それは愛です。親子の愛や兄弟や男女夫婦の愛といふことならばわかります。これは温かい心とおもいます。私も愛を求めています。A そうだろう。併し人間の愛といふものはどれだけあてになるものか、お前はまだ若いから夢のように永遠の愛

吾々のいのちの奥深く感ずる世界である。生きたまことが吾々にひびいて來るのである。釈尊がこのことについて吾々の目をさまして下されるのであるが、吾々を直接に導いて下さるのは親鸞聖人である。

B お爺さんはなか／＼真剣になつて言つて下さるので法藏菩薩のことが歴史や神話伝説でないとわかつたようには思いますが、併し私にはなかなか、その生きた誠といものうが感ぜられないのです。

A それはお前が自分の姿に目がさめていらないし、又この人生の無常ということを痛切に体験していなかからわからないのだ。親を亡くし、子を亡くし、兄弟を亡くし、友人を亡くし、そして自分が如何にもみじめな欲のかたまりであるというようなことがわかつて来れば、それと同時にその自分をどこまでも見捨てず嘔みたまう久遠のまことの生命が感ぜられて来る。そこに自然にお念佛も申されようになり、お淨土をも感ずるようになるのだ。

B もうよほど以前のことかと思ひますが、如来及び淨土の観念ということがその道の人々の問題となつたと聞いていますが、如来も淨土も吾々の観念であるというのでしょうか。観念ならば想像が生み出したものと言われると思いますが、どうですか。

A 如来及び淨土の観念というのが吾々の主觀による観

るとお爺さんは感じていられるらしいが、そうするとそこに矛盾がありますか。淨土に撰め容れられているならば穢土ではないということになりますが、淨土教では理窟を言う教ではないのだ。人生の現実は苦惱である、そして此の人生は無常流転の世界である。無常流転の苦惱にぶつかつて、何とも動きがとれなくなる時、吾々はただまことのいのちを求めるようになるのだ。まことのいのちというのは、吾々が自分の貪欲、瞋恚、愚痴などの煩惱にせめられ、又人生の無常を悲しみ苦しんでいる時、その吾々を底の底まで見とおして理解して、無限の憐みを以て吾々を久遠真実のいのちの中に攝取したまい、真実の世界、即ち淨土に往生させて下さるのが佛陀であるから、淨土というのは、佛陀の慈悲を離れて存在するものではなく、吾々が佛陀の慈悲を感じるところ、淨土は必ず吾々に開かれる。

B その淨土が吾々に開かれるというところがわからぬのです。穢土が淨土になるのですか。

A 佛陀の智慧と慈悲とを光明にたとえてある。たとえてあるというよりも智慧と慈悲とは吾々のいのちの底に染みとおる心の光ともいべきものだ。吾々は苦惱のどん底において此の光を感じるのだ。それは大心光である。この大心光が淨土に照り満ちて、その照り返しの光ともいいうのです。

A お爺さんはなか／＼真剣になつて言つて下さるので法藏菩薩のことが歴史や神話伝説でないとわかつたようには思いますが、併し私にはなかなか、その生きた誠といものうが感ぜられないのです。

念たというのならば、そんな如来や淨土は吾々の主觀でこしらえたものに過ぎないことになつていつでも吹き飛んでしまう。吾々人間が想像で作り出したものならば、心が変つて来れば消え去るものだ。

B どうもわからぬ。それならお爺さんが淨土を信ずるということについて確証なり根拠なりはどこにあるのですか。

A それは此の人生の深い体験と釈尊の教とがぴつたり合うところにあるのだ。殊に淨土という感じは自分の大切な親や子や兄弟など亡くして悲痛のどん底の心持で釈尊の淨土教に接する時に確かに感ぜられるのだ。それは理窟ではない直接の感じであつて絶対なものだ。お前などにはまだわからぬであろうけれども、これから後に色々の目に逢うだろうから、その時に科学ですべての解決がつくかどうか、無限のまことのいのちという釈尊の淨土教でなければ落着けないことを感する時も来るだろう。老人の世迷言などと經蔑せずに眞面目になつて聞いて置くが宜い。

B いや、悪口を言うてすみませんでした。併しその淨土と此の吾々の世界との関係はどんなになるでしょう。淨土は絶対の世界だ。この世と対立するものでないと言われましたが。そうすれば此の世は淨土に撰め容れられていることになりますが、しかも此の世は苦惱の穢土であ

きものが、此の穢土の吾々に触れる。そうすると吾々は穢土にありながら淨土を感じる。いや穢土が淨土に転ぜられるというような趣をほのかに感ずるようになる。少し相対的な言い方になるけれども穢土と淨土とは云わば炭と火のようなもので、吾々の貪瞋痴の煩惱の炭が転ぜられて、淨土の清淨、歡喜、智慧の光となるのだが、それはすべて仏がこれを為さしめたまうのである。吾々から言えば、大心光に融かされるようなものである。吾々の力ではない、仏のまことのいのちの力である。

B いよくわからなくなりましたが、併し人生は誠心を以て中心とするということは私にでもわかります。誠心をもつてすれば宜いのじやありませんか。

A その誠心というものが、吾々が自分の誠心と思つているものではあてにならない。吾々は微塵の誠心もないといふのが正直な話だ。ところが大無量寿經には「至心に迴向したまえり」とあつて、仏陀が誠心を以て吾々に一切の根源のまことのいのちを賜わるというのだ。吾々が自分の誠心だなどと思つてゐるものは未とおらぬ誠であつて、五分五分根性の當てにならぬ誠である。眞實に徹底する誠心は如來の至心である。絶対一如の世界から常住不斷に不実な吾々にそそがる至誠であり、まことのいのちである。そのまことのいのちに信頼して吾々は淨土に往生する

のである。穢土が転じて淨土になると言つたが、それは如來の誠によつて融かされて転ぜられるのだ。

B どうもわかつたような、わからないような気持です。それなら地獄とか餓鬼とかいうものはどうです。私は地獄や餓鬼の世界が別にあるとは思いませんが、併し親鸞聖人が、地獄は一定すみかぞかしなどと言つて居られるから往生淨土ということが容易に出来るものではないと思われますか如何ですか。

A 地獄は一定すみかぞかしというのは、聖人の御自身の姿に目ざめられたお言葉だ。その地獄一定の身であることを徹見してなお更に見棄てることが出来ないという如来の御慈悲を聖人は体験して居られるのだ。甘んじて地獄におちて行かれる、その地獄の瞋恚の炎を歡喜の光明に転ぜしめられるのが、仏陀、即ち如來の力だ。それは信仰の上に現れて来る不可思議の事実だ。理窟ではわからないが、吾々が直接に体験することだ。

B いや、これは大変なことを聞かされました。地獄は地獄、淨土は淨土と全く別の世界であると思つていたのに地獄が淨土に転ずるというのは、これは初耳です。それで餓鬼の世界は転じて清淨光明の世界となるのですな、これは愉快だ。仏教は大したものですね。以後悪口は慎みますから、お爺さんが此世に生きて居られる間、この私の心

が開けますように、そして淨土がわかりますように、どうぞ指導して下さい。

A 指導などということは出来ない。すべては因縁だ。お前が御慈悲や淨土に目がさめるか否かは全く因縁の問題で、この自分がどうしてやることも出来ない。併し自分とお前とが淨土ということをこんなに語り合つたことが何かの因縁になるかも知れない。やれ／＼有り難いことだ。若いものがどうやら此の老人の言うことに耳を傾けるようになつたわい。これもひとえに仏様の御力だ。絶対他力の世界に目をさまされた自分は何という果報者だろう。お釈迦様、阿弥陀様、有り難うございます。南無阿弥陀仏々々。

油屋三左エ門の歌

現世いのりやもの忌みせまい 弥陀のひかりのなかじやもの

人のあしきはわがなすわざよ 幾世へぬらん前の惡法をきく身とそだちし御恩 忘れまいぞやあけくれにつとめはげみて往かれぬ御国 おしえ一つで参るかなうれしどうとや月日のたつは やがてまいらんかの國へ

仏法は万人の問題である

眼の錯覚

私共は眼で見たのであるから間違ひはない、これ程確かなことはないと思い勝でありますが、人間の眼は不完全なもので、物の形を正しく見ることは出来ません。誰しも錯覚を持つていて、それによる間違ひはのがれることは出来ません。次の図によつてそれを示しましょう。

然しどちらかと云えば、順境にあつて求める人々は妙なく、不幸を縁とした人々が多いのであります。それは人生そのものがそのように出来てゐるにもよりますが、高僧方でも、たとえば法然聖人のように、父上が殺害せられ、その遺言によつて出家せられたような方もあります。

そうしたところから、仏教の信仰は、不幸な人、老人、病者、などの所謂弱者の求めるものときめて、健康で、家庭や仕事もうまくはこんでいる人々、若く元氣な者には無用であると思われ勝りますが、はたしてそうしたものでありましようか、そこを問題として考えて見ましよう。

A 図



C 図



花田正夫

太く、或は狭く見えます。又太陽なども地平線から昇る時は大きく見え、中天にある時は遠く見えます。これ等は眼の錯覚によるのであります。

ところが、同様に物を正しく見ることが出来ない場合に、しかし錯覚は、病的な状態ではなく、生理的自然の状態で、医師もどうすることも出来ず、また自分で錯覚を自覺し、十分に納得していくことは是正することは出来ません。

心の錯覚

以上は眼の錯覚を述べたのですが、心の上にも同様な錯覚を持つて居ります。そのために正しい判断が出来ず、事毎に失敗を繰り返し、こんなこととは知らなかつたということに出くわし、遂には五十年百年の人生を醉生夢死に終るものであります。而も眼の錯覚のように、それを知つていてもどうすることも出来ず、度々失敗を重ねても一向によくなれないのです。

第一には、無常のものを常としか思えぬ錯覚。これも自分に關係のない、他人の問題であれば、割合正確に近い判断を下しますが、自分と關係が深ければ深いほど、強い錯

とは覚えざるものなり云々」

とありますのも、この錯覚を指摘されたものであります。

第三には、「われかしこし」という錯覚であります。聖

人は「愚鈔」の上下二巻の巻頭に繰り返されて

「賢者の信を聞きて 愚鈔が心を顕わす

賢者の信は 内は賢して外は愚なり

愚鈔が心は 内は愚にして外は賢なり」

と、わが御身にひきあてて御示し下されたところであります。

但し、賢者の中にも「みのるほど頭の下る稻穂かな」と申します

が、私共はこれとあべこべで、内容が空虚でありますから

外に頭をあげようとも懸命にかかりはてて居り、無意識のうちにそなつて居ります。私は学生の頃、一燈園の真似をして下座行をしたことがあります、一寸でも殊勝らしいことをすると、たちまち、われこそはと頭があがる

のであります。八咫の大蛇は、一つの首を切ると八つの頭が生えると伝えられます、全く手のつけようのない身で、聖人の「内は愚にして、外は賢なり」の状態から金輪際出られぬ身と知られます。

「是非知らず、邪正もわかぬこの身なり」とあるのが、仮眼にうつる正確な私共の正体でありますのに、何時の間にか「善惡の二字知りがお」の大そらことに墮するのであります。そして「名利に入師このむ」泥沼の生活が続くので

覺をもちます。俳人小林一茶が次々と愛児を失つた時、

露の世は、露の世ながらさりながら

と句作して居り、西行法師は世の無常に驚いて出家し乍ら

夢の世を夢と見つ／＼はかなくも

なおおどろかぬおのれにあるかな

と歎じて居ります。又法然聖人の往生を北陸の配處で聞かれた親鸞聖人の歌に、

会者定離かねてありとはしりながら

昨日今日とは思わざりけり

とあると承ります。皆、無常の世にありながら、無常と教えられ、自分でもその通りとうなづきながら、しかも如何ともすることの出来ぬ心の錯覚の一つであります。

第二には、「われよし」とする錯覚であります。相対五分五分の人生では自分ばかりよくて相手ばかりがわるい、というようなことはあり得ません。聖徳太子の憲法の第十条にあります通り、「共に是れ凡夫のみ」であります。それが正しい人生観でありますのに、實際の問題となると「われよし」となつて、他を責めるのであります。

蓮如上人の御一代聞書に

「誰のともがらも、われはわろき、と思う者、一人としてあるべからず云々」

「人の悪きことはよく／＼見ゆるなり。我が身の悪きこ

あります。

心の錯覚の救済

このように、心の錯覚にもなお沢山ありますようですが、この心の錯覚のために、小は人と人との抗争から、家庭の紛争、大は国際間の戦争ともなる、この禍根が、何處で救われるか、救いの光は何処にあるかが緊急事であります。

これについて、眼科医を業とせられた別府の妙好人、故

安波歟八氏の『信仰体験録』中の「錯覚と迷惑」という章で大略次の様に述べていられます。

「近視や遠視は眼の病氣で、専門医にかかるればよいが、錯覚は万人どうすることも出来ぬ問題である。

この錯覚を持つ者に 非常に均勢のよくとれて、美しく、やわらかに見えるように建築せられたのが、世界の

古代の美術史を飾るパルテノンの宮殿の壯觀である。

と、極く手近な例をあげますと、大きな高い石碑を造るとき、そこに書きこむ文字は、上部は大きく、段々下部は小さくしなければ、錯覚をもつ我々には立派に均勢のとれた碑文字とは見えません。そこに書家の苦心があります。そのように、パルテノンの建築には大芸術家の直観力によって、眼の錯覚をもつ者に相応して、申分のない美しさを成し遂げられているのであります。

如何ともすることの出来ぬ錯覚の持主に、それは眼が不完全なのだから仕方がない、では、本当の美術は存在しません。その取り去ることの出来ぬ錯覚を知り抜いて、その者に、何時見ても美しく調和したものがあらわすところに真実の美術が存在するのであります。

仏陀の大悲

弥陀仏の大悲もここに暗示せられます。煩惱に覆われて無明にとざされ、渴愛煩惱に縛られた身は、無数の心の錯覚、迷妄を脱することは出来ません。然し、他力の悲願は「かくの如きわれらがため」であります。

無常を常としか思えぬ私共にして見れば「一寸した病氣でもすれば死にはすまいかと心細がつたり」また「長い間迷うて来た苦惱の旧里がすてられず、あきらめられず、いかにしがみついても万策つきて、力なく終る身」を「仏かねてしろしめして、ことに憐み下さる」のであります。ここに「いそぎ淨土にまいりたき心の無い者も、いよいよしたのもしき本願」と感佩させて頂けるのであります。

また「我等が身の罪業の深きことをも知らず、如來の御恩の高きことをも知らずしてまどえるを」聖人は「我御身にひきかけて」お教え下されて、「さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願

有れば有つて苦しみ無ければ無くて苦しむ、その根本の解決こそ緊急事であります。

一 道会の記 (一)

榎原徳草

池山先師の第二十四回の忌日である十一月八日を例年のよう縹上りて十月二十九日開催した。この日は前二日間が雨であつたし当日も霧のよな雨が朝はまだ降つていたので心もとなく思つて、しかし家の者だけでおこなつたこともあるし数人の学生で先師の御写真の前で尊い会合が催されたこともあるのであるから、今日は雨で少数の参会者でも仕方がないと諦めていたのであつた。所が一人三人と集つて結局三十餘人の人々がぬかるみの道を厭わず参集されて、案じたことはなく、まことに好い一道会が催されたのであつた。全く先師の遺徳のたゞならぬことが今更ながら尊く感ぜられることがあつた。

先師が御往生になつて昨年三十三回忌を営んだのであつたが、今年二十四回忌、もう来年は四半世紀の二十五回忌を迎えることになる。先師がこの地上で、吾々と同じ空氣を吸い同じ言葉を介してお念佛を語り、この眼での姿

を挙しその言動に接し得た深い驚きと憧憬、思慕と懺悔、先生の前で涙し乍らおのずからなる念佛の流露のうちに仰ぎ且伏した私共にとつて、先生が亡くなられてもう二十五回目の御往生の日、それを憶念してお念佛の会を一道会と称して相共に集る年に一度の会合が、もうそんなに遠い遙かな、過去という文字にとりかえてもよい年月の隔たりをもち、先生が歴史上の人に変つてしまいそうな悲しさを不図感じた私は、遙かな先生がひとときわ懷かしくてたまらないのである。そんな感傷にひたつて何になるのかと自分も思うこと他の人々もそう思つてくれるだろうが、感傷的とか上つづらとかいふ浅薄な感情でなくて、まことに好き師に遇に遭い得たこの希特の一大事からどうしてもそういう氣持が湧いてくる。それは兎角の話でも感傷でもなくしてそのもの自体がそうなつて振り動かしてくる全体露呈的な感懷である。あゝもうそんなに過去の帳の向う側へ行つてしまたままである。

さて、心の錯覚、迷妄に気づかれる人は、このことをかねてから知りつくされた、無限の御理解ある仏陀の大悲心をこうむつて、迷妄の間に光明が射すのであります。

しかも、この錯覚は個人的な病的状態ではなく、老少善惡、貴賤男女をえらばず、誰も持ち誰もどうすることの出来ぬことであります。それも、何等の害のないことであれば、仕方がないですまされますが、それあるために互に入類と家庭とを破滅に導き、暗黒におとす問願でありますから、仏の大悲大願を万人が一刻も早く仰がねばなりませず、また、そうした、難治、難化の迷妄を問題にして下さる教は他にないので、唯一無二の大医王の姿を仏陀の上に仰ぐのであります。

ところが根本の心の迷妄ということは問題にしないで、病人は唯恢復を願い、貧者は金を求め、子無きは子を祈るそうして思うようにならないと神仏にそれを祈願するものであります。が、眞実の教はそうしたものではありません。

「田有れば田を憂え宅有れば宅を憂う」

「田無ければ亦憂いて田有らんことを欲し、宅無ければ亦憂いて宅有らんことを欲す」

むすび

のかたじけなさよ」と仰がせられるのであります。

まわれたのか、来年は二十五回忌なのか、そう思う今年の追憶会であつた。いつものように阿弥陀経を拝読して、さて先師の尊影に向い歎異抄を拝読する私は、「ひそかに愚案を……」の序文のてんづけから感概深く師のことが去来彷徨して、まともに拝読することができなかつた、歎異抄が先師であり、親鸞におきてはが池山におきてはである吾々にとつては、師が歎異抄の「ひそかに」の「ひ」の一文字にも見えてくるのである。覚如上人が報恩講式の中であ「哀れなるかな、温顔は寂滅の煙に化し給うと雖も真影を眼前に留めたまう。悲しいかな、徳音は無常の風に隔たると雖も実語を耳の底に残す。」といわれるあの響きは、そのまゝ遙かになつた御往生の先師への私共の体感の詩であり歴史を超えた眞実の金言である。「榊原さん、たゞ念佛してですね」「いろいろのことがありましたが、只念佛してですね」等々の先生の実語は歎異抄の「虎の巻」——先生の云われる「只念佛」の奥伝の一巻と同じよう、あそこにもこゝにも池山先生の実語、如來の実語、として耳の底に残つてゐる。温顔は、みぞれの降るあの日に火葬場にお送りして寂滅の煙と化し給つたけれども、「よろこばぬにて」「たのもしさ」。「保木さん榊原さん、かくの如きの我等が為なんですよとの聖人の御言葉に、唯円房の蔭にかくれていたたほはぜも思わず、聖人のいます檜舞台に呼び上げ

まつた。皆様に電文を拝読して、先生にお遇いすることをこの会合の望みとして参られた人々にとつては誠に心空しき思いでありましようが、御了承願いたい旨を私はつけ加えずにはおれなかつた。

次で北大名譽教授で先師に独逸語を受講された永井一夫先生のドイツ、ハイデルベルヒ大学開催の小児科学会に会長として招聘され、彼地からの御便り「……小生の行つた国際学会を日本に招致希望に関する演説が予想を絶する一大反響を呼んで満堂の拍手どよめき鳴りも止まず更にそのあと絶讚と握手の総攻撃、あとの旅行も持てて持てて恐縮しています。池山先生に生きていて貰いたかつたです。……」端書を、先師と会合の皆様に御報告した。

又北岡行男法兄は、昨年から欠席の事情となつたが、その理由は、今迄の医業の場所を御長男に譲られて、自分は山の中の山坂に閉ぢ込められた診療所へ御夫妻で赴任されたためで、憶うに、開業の為し易い患者の落付いている永年労苦の故地を御長男夫妻に渡して、自身は山中深く分け入つて漸く老境に入らんとする心身のおとろえも忍苦して子ゆえに山坂を患家の往診にお念仏していられるのであるうと思われる。「姥捨山」の、捨てられに自ら進んで山中深く分け入つて苦労される北岡法兄よ、身体を大切に大いに頑張つて下さいと、私は心に叫び、涙を押えて、その欠席の

られて」等々の実語は今こゝに聞くことができる。「先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることをおもうに、幸いに有縁の知識にいらすんば、いかでか、易行の一門に入ることを得んや、全く自見の覺悟をもつて他力の宗旨を乱すことなけれ、仍て故親鸞聖人御物語の趣、耳の底に留るところ聊かこれを誌す偏に同心行者の不審を散せんがためなりと云々」この唯円大徳の歎異の涙に綴られた聖人面授口訣の耳の底に留る実語のそれは、そのまゝ吾等池山先師の強縁に催された者共にとつての実感であり追憶である……。

○

会は何時ものように私が司会して、読經、歎異抄拝読を終り、さて御講話、追憶所感の一人々々の御法味を頂くことになつたが、一時十五分に延して始めた今日の会も、実は花田先生の来否を気遣いつゝであつた。丁度お話を始めて頂く頃になつて花田先生は遂に今日御見えにならないことが電報によつて決定的となつてしまつた。前以て身体の調子如何によつて出席をきめる旨の通知であり、小妻が過日故郷の仏事に帰る途中、先生をお尋ねした時も、そのような御話を承つて帰つて来たのであるし、この夏の暑さと先生の痼疾とのためにことしの会は危みつゝ心待ちに待つておつたのであつたが、遂に来られないことがきまつてしまつた。

芳信を続んだ。「……今年も欠席の止むなき次第で相済まぬ事であります。地理的条件と交通事情、勤務の性質がからみ合いまして申訳ありません、お許し下さい。大和アルプス山系の中央、山麓の一寒村から遙かに一道会の光景、霧囲氣を偲んでおります。歎異抄を燃料とする阿弥陀湯のゆあみ心地を想うております。水源は旧師池山先生、湯女は白井先生、徳草師、花田師、その他法兄法姉の皆様。勿体なくありがたいことであります。晚涼の広き湯舟に浸りおり秋潮の寄せてはかへし吾を包み大いなる力を仰ぐ銀河かな」北岡さんは、さぞ「弥陀五劫思惟の願をよくく案じみれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」の聖人常の仰を常に往診の山路を登りつゝまた診療所に帰える路すがら南無阿弥陀仏、々々々々々々、と奉讃ひまなき御苦勞の日々であろう。一道会に参会と不参会と何れを是とし非とすることができるであろうか。參不參の是非は只、先師口訣の念仏中に撰在して余すところなしでありましよう。どうか北岡さんよ、身体を吳々も大事にされて病む山中の老若男女のために御相手になつて上げて下さい、お願ひ致します。

この北岡法兄の芳信を御披露してから、もう一通、曾て

十余年前に大谷大学在学中に聞法され、卒業後、常陸の國の自坊に帰られ、ずっと教育界にある法友から、お念佛の有難さが身に沁みて参つたとの嘉信を拝読して、余慶を領ち合つたものであつた。きつい業縁に撞き当られて、身動きのつかぬそこに「只念佛して」の聖人の声に安らわれ歎喜の称名に包まれたのであつたとあります、その一節

「私もお慈悲を喜ばして頂き何か十何年来の先生の宿題がやつと果し得た気が致して居ります、歎異抄の一々の御文も今までとちがつたお味合いと云いますか、おいしくいただいて居りましたが『信順を因と為し疑説を縁と為し云々』の御文に至り、ひとりでに涙が溢れて止らず、たゞ有難い々々と泣きながらお念佛を称えさせて頂きました、……全く有難いと思つてもこちらからは何も出来ない、お念佛だけです、頑迷で自力にのみ妄執している、それが可哀想だとの如来の悲願によつて……先便では投函のあと、実はしまつたと思つたのです、御信心をいただいたようなことを書いて先生に「これは本当の信心じやないよ」とおつしやられそうな気がして。しかし今度は大丈夫です、「いや、ちがう」とおつしやられても、平気のようです、うれしいことです。云々」この法信は、今日の先師影前に手向けて、香り高き一茎の菊花として一同御礼申上げたのであつた。

序文が大変長くなりましたが、これから会の本条に入ります。いつでも花田先生にお話を願つてそれから白井先生のお話を拝聴するのが例となつてゐるが、花田先生の病氣御不参で、親鸞会當時の第一の先輩である松本先生にお話を始めて頂いた。

松本さんは、先ず池山先師が京都に来られたこと、初めて解説された学生の一団、先師を中心にして親鸞聖人の主張された眞実の教に浴したこと、一道会の出発点となつたその時分のこと回想されて、此頃の所感をのべられた。聖人は「眞実の教とは大無量泰経これなり」と云い、「頭淨土真実教行証文類」と御本典を名づけられる。眞実とは虚偽に対するのであり、我々の虚偽不実に対し如來の眞実を顕揚されたのである。また聖人は穢惡汚染の我等に清淨と光明とを与えられた。これを繰返し明かされたのが聖人のお心で、特に「光明」ということを思う。ヘッセの詩に「彼は光へ光へとあこがれることに……」とあるが、池山先生は昭和四年に京都へ来られたが、それは、吾々学生の光への憧れに添つて、光としてお出ましになられたのであつた。聖人の聖教には光明の文字が沢山でてくる、御本典総序「无碍の光明は無明の闇を破する慧日なり云々」と仰せられる、十二縁起の無明の闇を破る光が淨土

教では無碍の光明である、四聖諦の苦・集・滅・道の、吾々の苦の原因は集であり、道の原因是滅であるが、この苦を滅するの滅は無碍の光明による。大無量寿経には「光顏巍々として威神極り無し」とあり、十二光仏を説かれる。

観無量寿経には韋提希夫人に釈尊は除苦惱の法を説かれ、

「この語を説きたまう時、無量寿仏、空中に住立し、……

光明熾盛にして具に見るべからず」と。阿弥陀経に「彼の

光明無量にして十方の国を照らす」「故に阿弥陀と名づけたてまつる」と。聖人は「智慧光の力より本師源空あ

らわれて淨土真宗ひらきつゝ選択本願のべたまう」と法然

上人を智慧光と仰がれている。また聖人の内室である恵心

尼公が常陸の國の下妻の境の郷にあられたときの、夢の

物語「堂供養のような法会がつとまる所で御堂は東向きに

立つており、御堂の前に立燭が白く立ち、その西に御堂の

前にも鳥居のようなものがあり、その横の渡しに仏像が懸けられていたと申された、さて又もう一体はどうなたかと問え

とけの頭光のように、まさしく御御形はみえさせ給わ

ず、たゞ光ばかりにてわたらせたまいいま一体はまさしく

仏の御顔であられたので、これは何仏であられるかと問え

ば、答えるお方は何人かわからなかつたが、あの光ばかり

の方は、あれこそ法然上人であらせられる、勢至菩薩で

あられるると申された、さて又もう一体はどうなたかと問え

ば、あれは觀音にてわたらせられますぞ、あれこそ善信の御房でありますよ、と答えられたと思うて、うち驚いておりましたのに、それは夢であります、」と。法然上人は光の形で現れ、聖人は觀音菩薩の御像として見られた。自然界の生物で太陽の光に向つて生長する。われら生死苦惱の前に光は点されていて、しかしその光を求めて行く者にとつて光への道が閉ざされている、けれどもこの閉じられ断れた道を「无明長夜の燈炬なり。智眼くらしと悲しむな。生死大海の船筏なり。罪障重しとなげかざれ。」と、よき人聖人が導いて下さる。池山先師にも私は光として引きつけられました。御往生まで十年の間お育てを蒙り、毎年一月には「一つの会」に参つたのであります。あの蓮華谷の御宅、八葉の蓮弁のそなまん中にある先生の御住居に和服で出てこられるあの姿を、今思い出されるのであります。「さ迷える者への光」として、先生は現れられたと私はそれと思うのであります。

次ぎに白井成允先生のお話を引続いてお願いした。先生は「只今松本先生は親鸞聖人、池山先生を光と味わられたお話をありました。私は拝聴しつゝ足利淨円先生のかゝれた提燈の赤い絵の下に、甲斐和里子先生の書かれたお歌を思い出したのであります」といつて「ともしうをたかく

かゝげてわがまえをゆくひとのありさよなかのみち」の歌を示された。（私は丁度そこに淨円先生一週忌の記念として頂いたその幅がかけてあるので、白井先生の近くの柱に急いで掛けなおしたことであつた。）

「無明黑暗の道を歩いて行く自分に、燈火^{ともしび}を高くかゝげて

私を照し導いて下さるの方、親鸞聖人。私には池山先生は御生前お会いできなかつた。近角常観先生のお世話を受けたが先生の御法話の中に池山先生が出てくる。両先生は精神的兄弟であられた。信を伝えて下さるお方々の中には、思想も信じ方もかなり異つたものがあり、その方の性格、個々人の条件などで、かなり異つている趣きがあるものである。近角先生は池山先生のように直観的芸術的ではなかつた。けれども池山、近角両先生は異体同心の感があり、同じ念佛の信心の御二人であり、同じ信心に生きていられた。（このように、白井先生は静かに談り出される。東昇先生も東京の学会を終えて真直ぐに京都駅から自動車で馳せ参じられる。井上善右エ門先生は同僚の教授斎藤先生を初めて伴つて来られる、大字氏、加藤氏は高槻市から、今田行信兄は愛知県犬山市から、宇野柳子姉は江州から、城一雄兄は豊中市から、その他京都方面から杉原さん、福本慶子姉、芦屋から梶井孝次郎氏の一家、その歎異抄の会の若い人々、それから中井玄英先生や蜂屋賢喜代師の御令仰しやる、問うように、困つたように、淡々と談り続けていかれる。）

私は大学へはいつて、始め、近角常観先生のお話を聞いた。近角先生は歎異抄を読むことを勧められた。こゝで初めて「淨土の慈悲」に引きつけられた。

『親鸞は父母孝養のためとて一遍にても急仏申したること未だ候わず。その故は、一切の有情は皆もて世々々生の父母兄弟なり、何れもくこの順次生に仏になりて助け候うべきなり。わが力にて励む善にても候わざこそ念佛を廻向して父母をも助け候わめ、たゞ自力を棄てゝいそぎ覚を開きなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦に沈めりとも、神通方便を以てまず有縁を度すべきなりと云々』この『六道四生のあいだ何れの業苦に沈めりとも……』母が、いかなる所に迷つて居られても、淨土に連れて行くことがそういう世界が仏教にある。こゝから私は歎異抄に牽きつけられたのであります、命の安らう教はこの教より外にないと思つたのでありました。——（先生がどうして仏教に帰入されたかを、キリスト教から仏教へ、近角先生の勧められた歎異抄の第五章「いすれの業苦に沈めりとも……」十一才で永別されたお母さん、その母と一つ所に安らいのできる教、それが見つかつたのであつた。）

嗣教正氏、その外に相愛女子大学教授の岡邦俊先生御夫妻、久しぶりで石田十九三兄等がいつものよう居並んで、静かな寂かな空氣の中に祕々と心に触れる引きしまりとうなづきとほころびとやわらぎに引き入れられて行くのであつた。）

白井先生は「池山先生は『親鸞におきては、只念佛して……』これが入信の契機であり、又生涯『たゞ念佛して』で

貫いて行かれた。私は近角先生の御世話になつたが、近角

先生に大変叱られたことがあります。それから、もう五十年近く過ぎたが、私はどう頂いているか。近角先生から叱つて頂いたことが、その時のことが貫いております

（と、先生の求道の跡を静かに談られた。否、お話の様子は独り言のように、一人の人に談りかけるように、淡々として力味がなく、白雲が幽石を抱くような塩梅であつた。先生は高等学校で二年間キリスト教会に通われ「神は愛なり」の語に魅せられて道を開かれた。所が問題はバイブルにキリストに順う者は天国に迎えられ、永遠に祝福せらるる、然し逆くものは煉獄に追いやられる、神は裁く、愛が何故裁くのか、これが問題になつた。先生はこゝで十一才で永別されたお母さんのことに集中される。亡くなつた母はキリストに依れば今地獄に居る。「神の愛がわからなくなつてしまつて、ごたくしてしまつたのですがね」と

私は高等学校から東京大学へ入学と決つたとき、東京での求道を三好愛吉先生から近角先生に聞けと授けられた、三好先生は「近角先生は、いつ行つても同じ話をされるお方である、お話は三四回聴けばわかつてしまふが、それを五年十年きゝぬかねばいけない、同じ話を、し続けている人は、本当の人である」と言われた。私の浅薄を見ぬいての上であつたと思います。その後、なるほど三四回聞くと解つてしまつて、この次はあのお話が出る、と思うようになつたのでありました、懶慢な聞き方であります。（先生は曾ての求道会館の光景を思い浮べていられるのであろうか、その日のことが目前に在る如く語り且黙して、お話をされる。）

私は明治四十三年十一月頃から近角先生のお世話になりました。大正二年大学を卒業、続いて大学研究室へ入りました。或る年の夏期求道会が求道会館で催された。聖人の御本典、教行信証の講話であります。

何年きいても解らない、懶慢な浅はかなきゝかただからわからない。所が近角先生は熱情を傾け、生命がけで説いていられる、打ちみる人々は眞面目に聞いている、お念佛している、或は跳躍歡喜、涙している人もあります。

ある日曜日の講話のとき、兵隊さんが泣いてお念佛して

喜ばれた。この方は日曜日に会館の前を通りフト這入つて生れて始めて仏教の話を聞いた人であつた、それがこんなに有難いお念佛を喜ぶ人となつた。こんな光景を見た。「あの方は幸せなお方だ。私は、どうすればいいのかと思ひましたがね」私は又「私は不眞面目だからいけない」と頻りに思つた、一度でも眞面目になつてと思い、今日こそマジメになつて、と思い、お話を聞いたのだが、近角先生のお話は二時間位熱烈に話される。今日もマジメになれなかつた。雑念が出る。眠くなる。「こんなことをくりかえしていましましたがね」

この夏期求道会の或る日の夕方であつた、或る方がたずねてこられたが、何か求道のことで近角先生に尋ねられたようだつたが、その時、先生の熱烈な声が、そんな、くだらぬことをなぜ尋ねるのか、と大喝一声されるのが聞こえた。その方の出てくるのと入れ代つて近角先生の前に出ました。そして、私は自分の質問を申上げる、私は、どんなに聞いても不眞面目だから聞けません、眞面目にどうしてもなれません、どうしたらよいのでしよう、と。近角先生は即座に「君は永い聞きいて何を聞いていたのか、私が一度でも眞面目に聞けといつたか。つと膝を寄せ畳を叩いて大悲の親心を烈火の勢で説かれる。そして先生は「眞面目ではなく、どうしても眞面目になれないのが君の本性な

「久しい間私は、私が淨土に往生して、何所かに迷つてくる母を連れ、還つてくる、そう思つていた。所が或るときこう思われた。淨土の教をきくお念佛する私は、小供の時に母に別れたことが御縁となつたので、実は母が私を淨土へ導いて下さるのであつたと。」

「こゝ淨住寺様に居らせて頂いたときであつた、「木も草も鳥も巣いわおも声あげて、み仏をほぐこの境かも」と歌うたこと、そんな恍惚とした思いにひたることもあつた。然しこれも懈慢界に墮ちゆく姿である。人生は、煩惱の燃えあがる姿であつて、それを救うて下さるのがみ仏でありますよ。これが本当の姿でありましょ。」

「煩惱は此の世の終りまで過ぎてゆく。よいと思つてやつたことが、それがそのままおごりたかぶる心になります。これが始終のことでありますね。浅間しい者を、こういうものを、見捨てぬと呼び下さる。花田先生が御病氣であつても、その御病氣をどうすることも私にはできぬ。浅間しいものですね。」

「フルシチヨフが太平洋の真中へロケットを打込むことによつて、幾億の魚群が生命を亡くしたことでしょう。然しこれはどうすることもできない。けれども『何れも何れも順次生に仏となりて助け候べきなり』との教を聞くことによつて、お念佛を聞くことによつて、恐ろしい、いきどお

のだ。その君の眞面目になれない本性を、それが臣哀想と、阿弥陀仏は御苦勞下さつて、南無阿弥陀仏を御成就下さつたのである。その本性が可哀想と、どこどこまでも御相手下さる大悲の親様である。絶対に同情してやまない仏が阿弥陀仏である。」と。

白井先生はこの近角先生の言下に受けた感懷を次のように述べられた。

「先生は力強く言つて下さつた。しかし私は鈍感な人間で強く叱つて頂いても、その場で廻心はできない。只思つたのは、今まで眞面目になろうとしていたことが、身の程知らぬ傲慢であつたと氣付いたのであつた。この傲慢な者を憐れと呼んで下さる親さま。眞面目になれぬ、また不眞面目にも徹底されぬ、それを憐れと御思召し下され、照し出しさる。以後、これが生活の根本となつたのであります。」

「現在、不眞面目な私を必ず救うて下さる、それが南無阿弥陀仏に誓われてある。それが深く滲み込ませて下さる。それが、親鸞聖人のみ教のおんまことであり、不眞面目なやつを、いつも、南無阿弥陀仏と附き添つて、護つて下さる。その究極が、淨土としての建立となる。

仏教の淨土の世界はまことに有難い世界である。此の世を去つた亡き母と共に不眞面目な者を救う本願が、終極的に成就して淨土となる。」

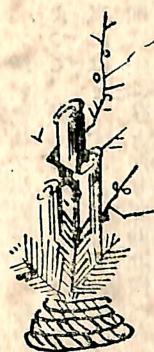
ろしい、どうすることも出来ぬ者を助けて行く道が開かれ

てくる。

親鸞聖人は『一切の有情は皆もて、世々生々の父母兄弟なり、何れも何れもこの順次生に仏になりて助け候べきなり』と仰せられる。一切の有情はみんな世々生々の父母兄弟であるという、この非常に高い思想、深い／＼思想をどうぞして世界の人々に知らせたい、知つて頂くようにと思うのであります。』

「この頃『釈迦』という映画が仏教を傷つけます。冒読する。それは悲しいことであります。製作者はファイクショーン作りことであつても仏教の精神で作つたという。仏教を公然と傷つけるがどうする事もできない。結局は私共の横着な宿業の暴露であり罪業の暴露であつて、申証ないことがあります。これを救わんと立たれた仏、その教に会わせて頂くことは有難いことであります。」

(白井先生のお話は大体右のようであつたと思ひます。墨書きを辿り乍ら綴つたので、どうもあの時の実感が現れてこない、誠に残念であります、これで御想像願いたいと存じます。)



あとがき

新春を賀し奉ります。本年も皆々様のお念力に護られて「慈光」第十四巻の歩みを続けさせて頂きます。

さて昨年頃からいたましいことは青年の自殺者の増したことであります。これは終戦直後の大混乱の時にも、優秀な青年学生の自殺が続出しまして、自殺防止会といふものまで出来たことがあります。それにつけて近角先生の「煩悶の下に光明あり」との原稿を巻頭に掲げさせて頂きました。

「先づ聞け」聞いても十分でない時は「待て」とのお喚び声、心に深く刻まれることであります。

「仏法は万人の問題」一分一厘如何ともするとの出来ぬ私共の心の底を見抜かれての仏の本願のおこりの一端を銘記させて頂きました。参考にさせて貰いました信託体験録は京都市左京区高野泉町四〇、香華書院発行であります

御名ここにありて雑煮のめでたさよ

山村信子

「浄土問答」の福島先生の原稿は「浄土の莊嚴」から頂きました。私の慈悲から建立された浄土、自分の業報の自然の果として遁れられぬ地獄、その業報が仏力に転ぜられる不思議さを問答体にして言葉やさしく説いて下さいました。



毎月廿四日前午後、昭和区小桜町、教
西寺。法話会。



御案内

毎月、第一、第二、第三日曜、一道会講話
市電、新郊通り一丁目下車東一丁半入ル

定価一部 二五五円（送共）
半年 百五十五円（送共）
一年 三百円（送共）

名古屋市南区駄上町二ノ八八	編集・発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走三八	印刷人 本田政雄
名古屋市南区駄上町二ノ八八	振替口座名古屋一〇四七〇番